ち くの伝統守っていこう大切に

鬼来迎とは

人が死ぬとき、死ぬ人を仏が極楽浄土へ迎へ導きにくることを来迎という言葉で表現しているので、鬼舞と来迎を合わせつくった術話と言われています。

この劇は、毎年8月16日に広済寺で施餓鬼が行われるおりに、境内に仮設の舞台を造って壇家の青年が仮面をかぶって演じてみせる地獄劇です。これが鬼来迎です。

あらすじ

大序

地獄の閻魔大王、倶生神、鬼婆（奪衣婆）、黒鬼・赤鬼が勢揃いして亡者の罪を判じ、亡者を鬼が責める場面。

和尚道行

虫生の里のとある辻堂。一夜の宿をとりおくれた旅の僧石屋は、そこで偶然地獄の鬼に責められている妙西という娘の姿を見る。

墓参

妙西の親・椎名安芸守と妻顔世が娘・妙西の墓参にきて石屋にあい、彼を屋敷に伴う場面。

和尚物語

城主・椎名安芸守の屋敷の場。石屋が辻堂の中でみた娘の苦患のさまを語ると、安芸守夫妻は、それこそわが娘と歎き悲しみ、やがて石屋の教えに従って娘を地獄に落し入れたみずからの罪障の消滅と、娘の成仏を願って、広済寺の建立を石屋に約束する。

賽の河原

ふたたび幽界に戻って賽の河原で遊ぶ幼児たちが、地獄の鬼に追われるが、地蔵菩薩が救う。

釜入れ

一人の亡者を鬼婆（奪衣婆）や黒鬼・赤鬼が責め釜ゆでにする。

死出の山

前景に続いて鬼婆（奪衣婆）や鬼が亡者を責めに責め、これを死出の山においやる。しかし最後に観世音菩薩があらわれ、鬼を負かし、亡者を浄土に連れ去る。

以上の7場からなっていますが大序、賽の河原、釜入れ、死出の山は、地獄の情景と菩薩来迎の姿を描いたもので、広済寺建立の由来を説いた和尚道行、墓参、和尚物語とは筋立ちも趣きも異なっていて、本来はひと続きのものではないようです。

現在は、大序、賽の河原、釜入れ、死出の山の4場面が演じられています。

文化財に指定

昭和27年　国の〝助成の措置を受けられる無形文化財〟に選定される

昭和31年　県指定無形文化財になる

昭和51年　国の重要無形民俗文化財の指定を受ける

昭和38年11月郷土芸能ＮＨＫで収録

誕生

江戸時代にかかれた『広済寺鬼堂略縁起』によると

後鳥羽院の頃、紀伊高野山に石屋という和尚がいて、仏道修業の為この村を通り仮寝の宿とした時、ふと庭を見ると妙西という若い女が現れ、赤黒の2鬼はあらゆる限りのせっかんをしました。

石屋は驚き村人に話すと、城主椎名安芸守連尊の一人娘だという、石屋は再び安芸守に面会して昨夜の模様を詳しく話すと安芸夫妻は涙を流して、「実は一人娘を失い今日は初7日である。」といい、なお安芸守は領主として良民を苦しめたため因果応報は娘の身にかかったかと即座に広済寺を建て娘の菩提を弔いました。

この劇は、石屋和尚がまのあたりに見た妙西信女の責め苦から成仏に到る4幕の大序・釜入・賽の河原・死出の山を綴ったものです。